

AMDA

多様性の共存

ジャーナル

特定非営利活動法人アムダ (AMDA)
<http://amda.or.jp/>
 特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構
<http://www.amda-minds.org/>
 特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター
<http://amda-imic.com/>

2011年4月25日 VOL.34 第25号 定価550円

発行 / AMDA 〒700-0013 岡山市北区伊福町3-31-1

TEL 086-252-7700 FAX 086-252-7717

E-mail: member@amda.or.jp

2011年
4月号

4

緊急救援

救える命があればどこへでも

東日本大震災緊急医療支援活動



3月16日の大槌町

2011年3月11日に東北および関東地方を襲った地震と津波に加えて福島原発の被害は世界を震撼させた。「日本は天から見放されたのか」と誰もが疑った。私はインド連邦ビハール州のブダガヤにあるホテルの一室で第一報を聞いた。ブダガヤは釈迦が悟りを開かれた地である。何故に私は日本にいないのか。阪神大震災の悪夢がよみがえった。嘆く暇があれば動け。被災者は何を求めているのか。何を必要としているのか。被災地で考える。岡山の本部に「すぐに先遣隊を被災地へ」の指示を出した。3月12日に先遣隊3人は車で宮城県仙台市青葉区、若林区に入った。私も13日にインドからバンコク空港、関西空港、伊丹空港経由で新潟空港に着き、車で仙台市青葉区に入った。AMDAの活動、即ち「あなたを見放さない」そして「困った時はおたがいさま」のメッセージのもとに「命を救い、生活を支え、絆を深める」に集約され考えられるあらゆる活動である。

AMDAは宮城県仙台市宮城野地区と同県本吉郡南三陸町、そして岩手県釜石市と上閉伊郡大槌町で避難所での診療と巡回診療を実施した。1995年の阪神大震災の救援活動とは根本的に状況は異なっていた。即ち、地震被災と津波被災の違いだった。被災しながらも



診療風景3月

避難所診療を続ける地元の医師を支援する形式で、全国から熱意あふれる140名以上の医療スタッフを被災地に送り込んだ。

災害医療は救急救命に始まり避難所医療、地域医療（保険診療）、中核病院医療そして全体医療計画整備へと経時的に移行する。阪神大震災の時にも経験したことが、一番困難なのが避難所医療から地域医療（保険医療）への移行である。阪神大震災では、全国から集まった若い医師たちの情熱が撤収を理解できなかった。今回は、地域医療を担うべき開業医の診療所が壊滅状況だったので、仮設診療所の提供など国の施策が不可欠だった。同じく壊滅状況下にあった県立病院のみを再建しても地域医療の回復は望めなかった。

海外では、数多くの風評が出回る中で、2つのことが注目されていた。福島原発の被害と避難所での暴動がないことだった。避難所には「格差なき信頼の秩序」があった。4週間にわたって秩序が維持されていたのは感動的だった。AMDAが海外の医療団体を積極的に受け入れたのには理由があった。本国に「格差なき信頼の秩序」を伝えてもらい、日本に対する「同情から尊敬へ」と意識を変えることだった。百聞は一見に如かずの格言の如くである。

「ピンチは最大のチャンス」とは「絆を深める」ことである。日本国民が日本の歴史に残るこの大災害に「困った時はお互いさま」の相互扶助の精神



AMDAの活動地

で絆を深めることにより、起きると言われている南海地震などに対して一致団結して対処することができると確信する。阪神大震災の地震被害に対する教訓と東日本大震災の津波被害に対する教訓を国民の智慧として後世に残すことは、両災害に災害医療救援活動として関わったAMDAの責務として考えたい。

AMDAは国内での災害である阪神大震災、新潟県中越地震そして中越沖地震に加えて、ここ数年だけでも四川省大地震、ミャンマーサイクロン、ハイチ大地震、チリ地震津波、パキスタン洪水、ニュージーランド地震などの世界の災害に関与してきている。これらの災害の被災者の方々と東日本大震災の被災者の方々ととの絆を深めたい。この人と人との環が世界平和への道筋になれば、AMDAの提唱する「市民参加型人道支援外交」の実現として望外の喜びである。
 AMDAグループ代表 菅波 茂 医師

東日本大震災緊急医療支援 活動開始からこれまでの活動

(4月11日現在)

【3月11日】東日本大震災発生 マグニチュード9.0の地震と大津波による甚大な被害が報道され、それを受けて直ちに医療チームの派遣を決定。【12日】午前AMDA第一次医療チーム出発、宮城県仙台市内被災地入り。【15日】仙台に医療チームを残し、医療チームメンバー出身地の岩手県釜石市、岩手県大槌町へ移動、新たな拠点として活動を開始。【19日】宮城県南三陸町からの要請を受け、この日から医療チームの派遣を開始する。なお、宮城県仙台市、岩手県釜石市の拠点についてはそれぞれ活動を終えて、現在は岩手県大槌町、宮城県南三陸町の2拠点での活動を行っている。巡回診療には、ガソリンの不足する中、岡山県総社市からの電気自動車が役立っている。被災地のニーズや派遣者からの活動報告を受けながら医療チームを派遣し、4月12日に出発する第24次派遣でのべ132名の派遣を行うこととなる。内訳は医師48名、看護師27名、助産師3名、准看護師2名、薬剤師3名、心理士2名、調整員(補佐、通訳含む)43名、介護スタッフ2名、鍼灸師1人。【4月8日】AMDA『歌の処方箋』プログラムに賛同した演歌歌手北山たけし氏が、南三陸町立志津川小学校に駆けつけた。【物資支援】医療チームの派遣と並行して、被災地への物資の提供を行っている。被災地の派遣チームから、刻々とかわる必要物資のリクエストを受け、岡山の本部で物資を調達し大型トラック等で現地へ届けている。(4月11日までに全7便。)主な物資:医薬品、衛生用品、カルテ、超音波診断器、心電計、携帯充電器、生活支援物資、米、野菜、各種食料品及び飲料水、オートバイ、自転車、洗濯機、コンピューター、事務用品など。巡回診療車両の運転など、派遣チームだけでできない様々な仕事を、地元被災者の方に働く場として参加いただいている。



(株)ノエビアアビエーション協力によりチャーター便で岡山から花巻へ

被災地医療支援活動の様子

避難所に常駐しての医療活動と、小さな避難所や自宅避難をされている方たちの巡回診療を行っている。当初はインフルエンザなどの流行が懸念されたが、避難生活がほぼ一か月たった今、衛生状態が悪化することにより、ノロ・ウイルスの発生が見られる。AMDA医療チームは診療活動に並行して、衛生習慣啓発活動や、清掃などを積極的に行い、流行を防ぐよう努めている。避難所で暮らす人々は、心身ともに疲労が見られ、精神的な疾患が悪化している方も多く、精神科の医師や看護師を派遣するなどの対応も行っている。また鍼灸師の資格を持った医師による、鍼灸治療なども取り入れており、高齢者の方々に大変喜ばれている。訪問診療時には、物資の宅配も行っている。避難所での体を動かすことが極端に少ない生活の中で高齢被災者の介護必要の度合いが高くなりつつある。体を動かすことを促すよう工夫している。

また広いスペースでたくさんの避難者が生活する避難所ではプライバシーが確保できないため、避難所に間仕切りを設置したり、個室を確保できる検査トラックを設置するなど、医療の周辺ニーズにも対応している。



物資を乗せたトラック大槌高校避難所に到着

今後の活動についての展望

地元の医療施設が立ち直り、本来の保険診療、地域医療が復活することを目指し、地元の医師の復興を支援する「地元医師支援」、また、新学期を迎える時期にあたり、文具やランドセルを大槌町など被災地へ送る「教育支援」、被災地の高校生を対象とした「奨学金プログラム」など計画している。



検査トラックの設置

被災地現場でAMDAスタッフに寄せられた声をご紹介します

「昨日、ずっと行方不明だった娘がDNA鑑定で見つかったの。最近歯ブラシで鑑定できるのね…だから昨日ずっと眠れなくて…涙が止まらなくて…それで血圧も170以上になっちゃった。でもね、こんな時は押さえなくて泣くほうがいいわよね」(血圧のお薬を取りに来た女性60代)

「今はここにたくさん緊急支援をしてくれる人たちがいますが、もうすぐ私たち地元住民だけが残ります。町の再建には

何年も何十年もかかるでしょう。でも、同僚の分まで僕はここで町のために進んでいけなくていいですね…。」(県危機管理課の30代男性職員。5名の職員のうち、3名が死亡・行方不明)

「青いジャンパーを見ると元気がでるよ。いつも笑顔で元気だもんね。」(大槌町避難所の方々)

AMDAの活動に参加して一被災地の医療・公衆衛生支援の必要について 小林廉毅 東京大学教授・公衆衛生学

東日本大震災から2週間後の3月25日に被災地の一つである岩手県釜石市と大槌町に、AMDAの医療ボランティアチームの一員として入った。1週間、医療支援活動とともに同地区の避難所を見て回ることで、今後の医療・公衆衛生支援に関わる課題を3つ考えたので報告したい。

第1に、被災して避難所で生活する住民の健康問題である。ライフラインの不十分な避難所に多くの人が集住することで起きる健康障害は少なくない。インフルエンザや感染性胃腸炎（ノロウイルス）の発生、食事の偏りによる栄養欠乏症や便秘、身体活動の低下による血栓症や筋力低下、プライバシー確保の困難や震災後ストレスによる不眠・メンタルヘルス問題、そして高齢者の介護である。これらの問題は避難所の状況が様々であるため、避難所毎に対応は異なるし、なかには仮設住宅に入居しても解決しないものもある。いずれもすでに指摘されているものであるが、今回の大震災は規模がはるかに大きいので、組織的な取り組みが必要である。地元の医療従事者だけでは対応しきれないニーズを補うため、長期の医療・公衆衛生支援チーム、いわばPost-DMATの編成が必要と考える。Post-DMATは上記の課題に対応するため、多職種チームとなるだろう。

第2に、これから本格化する、がれき撤去作業に係わる地元住民やボランティアの健康問題である。がれきには津波による多量のヘドロが加わっている。撤去作業では、粉じんやそれに含まれるか

もしれない有害物質への対処のため、作業に適したマスクと服装が必要である。また、釘刺し事故による破傷風対策を講じる必要もある。ボランティア団体の多くではそのような指導がなされていると聞けるが、地元住民に対しては当該作業に関わる健康教育が改めて必要であろう。長期的な課題として、がれきの粉じんによる健康障害を解明するため、今回の大震災で先頭に立って活動する多数の自衛隊員などを対象にした疫学調査を早急に始めることが望まれる。

第3に、地域の医療システムの再建である。大槌町では、医師4人の県立大槌病院と5箇所の民間診療所がすべて被災して使用できなくなった。現在、避難所も含めて地域の医療は、上記医療機関の医療従事者と多くの医療支援チームによる救護所（避難所等に設けられた簡易診療所）や巡回診療で担われている。しかし、医療支援チームは徐々に撤退する一方、医療施設の再建には時間を要する。しかも、もともと医師人口比が全国平均の1/3に満たない医療過疎地域である。仮設住宅の設置計画に仮設診療所も含めること、必要な医療機器の貸与または給付、後方病院からの医師派遣、保険診療への復帰の道筋をつけることが重要である。医師派遣は地元の要請のもとに国が全国の医療機関に号令をかけるという強制力が必要であろう。保険診療への復帰は早期に行うべきで、それによって地域医療の再建につながる。患者の自己負担はすでに政府の方針により、ゼロとなることが決定している。

今回の未曾有の大災害でかけがえのない家族と家財を失った方々には心からお見舞いの気持ちを伝えたい。とりわけ子どもを亡くした親にはかける言葉がないが、子どもの魂はいつもあなたのそばにいと信じている。

米田 哲 医師

[大槌市・釜石市]

3月20日から岩手県での活動に参加した米田医師からの、3月27日の電話報告から抜粋したものです。

一 大槌町は津波によって、沿岸部の病院、クリニックなどすべてが流され、医療機能はゼロに等しくなった。生き残った医師、看護師も被災し、避難所に避難しながら診療をしている。大槌高校避難所の医療は、震災直後から大槌病院スタッフが取り仕切っていた。当初の医薬品は大槌病院の薬剤師が独自のルートでAMDAにも手配してくれていた。2週間がたち、スタッフは震災後はじめて家族や友人を探したり、自分の家の様子を見に行くことになり25日から診療を止めた。4月15日までは大槌病院の事務職員も含めて医療活動休止の方向。それまで、大槌病院の管理下だった大槌高校避難所の医療は、仕切る人がいなくなり、いろんな団体が短期間入ってきては慌たぐ帰っていくといった状況になってきた。現在2か所の医師会が入っている。が、どちらも29日か30日に引き上げ予定。AMDAは高岡医師が診療を続けている。

総社の電気自動車を使って巡回診療をしている。アイビームの使い心地は上々。半日使用して一晩(13時間)充電といった使用。

元持調整員が紹介した地元民生員とともに、山奥へも巡回診療を行った。そこは50世帯ほどの場所で、ほとんどが高齢の老夫婦。病院に行けず、薬がなくなり、基礎疾患(持病)が放置状態。糖尿病の人がとんでもない血糖値をだしていたり、高血圧がひどくなっていった。ガソリンもなく、バスも来ないため避難所まで降りれず、支援を受けることができない状態だったので、巡回診療は3日から1週間おきに定期的に行っている。

【釜石市】17時から毎日行われる釜石市対策本部のミーティングには、AMDAは毎日必ず医師が参加しており、結構頼りにされているようだ。対策本部で医療ボランティアの振り分けがされる。

【大槌町】釜石市とは反対に、大槌の対策本部は孤立無援状態。通信できず、たどり着くまでの道のりは瓦礫でいっぱい。対策本部といっても医療情報は全く入ってこない。町長がいなくなって、指揮官がいなくなってしまった。AMDA派遣チームの医師の間では、以下の考えが周知されている。大槌の医療を立て直すにはかなり時間が必要。県立大槌病院が仮の場所で診療を開始するまでの間、AMDAなど、誰かが助けないとどうにもならない。地元の医療が復帰してきたら、介護が始まるだろう。

井関ふみこ 調整員

派遣期間 3月29日～4月9日

派遣場所 岩手県大槌町

業務報告(抜粋) 現場の業務調整に従事(宿泊先は釜石ベース) 主な業務内容:東和チームとの調整、元持調整員のサポート(配車/ドライバー/宿/銭湯手配)、AMDA全体会議の開催、タイチームの対応、物品仕分け/運搬、トレーラーハウス(検査室)の整備、地元開業医からの情報収集、パワープレート、取材同行等

感想など 微力な調整しか出来ず、反省面も多々ありますが、多くの方々の募金/本部の支援のお陰で12日間の活動を終了することが出来ました。電気の再開・信号機の設置・道路の開通等、短い滞

在期間にもかかわらず、毎日の様に状況が改善されていく様子には、感銘を受け、日本の底力を感じました。又、弓道場での活動を受け入れてくださった植田医師や、余震直後の夜中1時にガス業者が東和ホテルに駆けつける等、現地の方々のプロ意識には、頭が下がる思いで一杯です。一方、被災者の間では、不眠、疲れ、孤独、ストレス、うつ等が広がってきています。精神的サポートを心がけられている佐々木鍼灸師の支援も含め、緊急医療活動終了後も、大槌町の復興支援が継続されることを望みます。今回は、AMDAチームの一員として活動に参加し、素晴らしいメンバーとの出会いもありました。このような機会を頂きまして、感謝申し上げます。

小倉 健一郎 医師(AMDA兵庫県支部) [仙台市・石巻市]

3月11日、東北地方の地震・津波のニュースを見て、すぐAMDA兵庫県支部のメンバーに連絡を取り、明日から被災地に行けるという鈴記医師の車で現地へ向かうことにした。薬品も何も持たず、まずは先遣隊として視察したり、被災した病院支援に入るつもりだった。活動先を模索しながら進んだが、最終的にはすでに仙台に入っているAMDA本部チームと合流することにし、仙台の拠点に辿り着いたのは13日の夕方だった。14日から仙台市役所、医師会、保健所に出向いて、AMDAとして主に宮城野区の避難所の巡回診療を行うことが決定された。このとき既に仙台では食糧やガソリンの不足に加え、原発の爆発による影響が危惧されるようになり、活動の継続性が危ぶまれる状況だった。翌15日、最終的に3名の医師を仙台に残し、一部は岩手県に移動、その他のメンバーは撤収することになった。15日から指山医師と瀧崎医師は拠点となっている「ひなたぼっこ」のNPO・CLC(全国コミュニティーライフサポートセンター)の看護師とともに巡回診療を開始した。私は新潟のマツキョで風邪薬・解熱剤などの市販薬品、湿布、ホッカイロ、ガソリン、食料などを買い込んで16日に仙台へ戻った。17日からは指山医師と私と二瓶看護師(CLC)の3人体制で、自車を運転し宮城野区の診療所を巡回した。14日の段階では各避難所の食料配給は乏しく医療チームも入っていなかったが、この頃から他の医療チームや地元の校医の巡回が増え、医療ニーズが低減したので18日は石巻市の

避難所を巡回した。石巻市の避難所にはまだ巡回診療が入っていなかった。19日、南三陸町の拠点避難所であるベイサイドアリーナを視察した。そこの救護所が混乱していたため、その場で診療に参加することになった。翌日もこの救護所で診療に加え、医療チームの巡回表や避難所マップ作成、救護所トイレや診察室の整備などを行った後、活動を他チームに引継ぎ、仙台に戻った。紙面の都合で活動の詳細は書ききれないが、未曾有の津波災害で家屋を失った多数の被災者のケアが重要な時期に、最初に巡回診療を行い、現場から情報発信も行えたことで、後続の支援活動に役立てたと思う。



右から小倉医師、指山医師、二瓶看護師。仙台の避難所で

塚本 勝之 医師(公衆衛生)

2011年3月11日午後、東北および関東沖合いで発生したM8.9規模の巨大地震による大津波が発生し、主に岩手、宮城および福島で甚大な被害が発生しました。この被害に対しAMDAは宮城県仙台市の被害地区に対し医療支援の活動を決定し即時に活動を開始しました。この活動に対し自分は基本活動の設定のため仙台市青葉区・若林地区に2次隊として派遣されました。期間 2011年3月12日より2011年3月15日まで

自分は、大政調整員、松井医師、向井看護師と共に新潟の支援拠点を經由して現地に入りました。活動内容は以下の通りです。

1. 支援活動拠点の決定
2. 基本的な活動必要物資の搬送
3. 活動内容の決定
4. 基本的現地情報の把握
5. 現地医療関係者およびボランティアとの協力体制の設立
6. 活動内容の経時的評価および改善

支援活動拠点は仙台市青葉区「ひなたぼっこ(全国コミュニティーライフサポートセンター、CLC経営)」となり、派遣者宿泊施設

も提供されることとなりました。この施設を拠点にAMDAは各活動を開始することになりました。現地での活動支援拠点(東横イン、新潟駅前)で派遣者生活必需品、基本支援物資を新潟市内にて調達しました。内容は数日分の派遣者食料、寝具(寝袋)、ペンライト、乾電池、石油ストーブ(支援用)、米(支援用)などでした。被災地区の物資不足と支援者の食料および生活物資の調達のため、食料品、カセットコンロ、ガソリンなどが不足しつつある状況でした。調達できたこれらを1BOXカーにて現地支援者片桐氏および倉島運転手とともに、特別緊急車両の認定の元、福島経由の高速道路にて現地活動拠点まで搬送しました。その後は現地の変化する被災者の需要に対応するため、必要物資をピストン搬送とすることにしました。

今後に向けて

現在の緊急支援の重要点は、活動の現地関係者への引継ぎだと思います。NGOはいずれ被災地を離れることとなります。その間に現地の医療関係者にバトンタッチ出来るよう、早い内から現地医療関係者との連絡の取り合いが必要だと思います。

新潟-仙台に向けてロジスティクス拠点

仙台市被災地での活動の後方支援として、3月12日から16日まで新潟にロジスティクス拠点を置き職員が駐在しました。災害時の連携協定を結んでいる明るい社会づくり運動の新潟支部のご協力で、食糧、飲料水、燃料、寝袋など被災地では手に入らないものを調達し、また新潟空港から仙台に向かう派遣者の搬送に、新潟-仙台間を毎日車両が行き来しました。また日赤新潟支部、新潟市社会福祉協議会のご協力もいただきました。新潟の皆様感謝申し上げます。



高田 陽子 医師 [仙台市・釜石市]

支援活動参加の経緯

今回の災害は、東北特に宮城、岩手の沿岸地域の被害状況があまりにひどく、私自身の家族、親戚がその状況下にあったこと、自分の生まれ育った町のため少しでも役に立ちたいという思いから参加を希望しました。職場の院長は自分の故郷のために行きたいという気持ちを最大限に組んで快く送り出してくれました。出来ることは本当に少ないかもしれませんが、出身が東北の医師の自分にしか出来ないこともあると思います、たとえ十分な医療行為ができなくても行くべきだし、行きたいと思いました。

業務

3/14東京から新潟へ向かい、他の派遣者の方々と合流後、宮城県仙台市へ向かいました。到着が夜だったため、その日はミーティングのみで、次の日、仙台市宮城野区の避難所の巡回診療にあたりました。午後からは岩手県釜石市に向かい、遠野市で活動拠点を決め、3/16から釜石市釜石中学校避難所で泊り込み診療を行い、3/20までの5日間昼夜、釜石中学校・双葉小学校・釜石市民体育館・大槌弓道場などを巡回しました。

気付き・反省点

私は日常業務においても、老人医療や在宅往診などをやっているため今回に関しては、その経験を生かすことができたように思



被災した高田医師御実家

います。超急性期と違い、疲労やストレスなどによる内科的疾患や高齢者における慢性疾患の対処などがメインだったためですが、十分な薬もない状態でいかに患者さんを安心させ、治療を施すかを考えさせられました。十分な医療ができなくても、医師がいるというだけで安心感をあたえられることができることを知り、医師という仕事の責任や重大性を改めて思い知らされました。難しいとは思いますが、他の医療支援団体や地元の病院などもっと情報共有ができれば、もっと早い段階でより良い医療が提供できたように思いました。

次回参加される医師(或いは看護師)への提言

- ・現場の声を良く聞いて、今何が一番自分たちに求められているかを判断して行動することだと思います。それはその場所、その時期、その災害などでどんどん変化していくものだと思うので、敏感に感じ取って、柔軟に対応できる力が求められるでしょう。
- ・現地に行って、医療従事者として歓迎されたとしても現地の人たちにお世話をかけるのではあまり意味がないと思います。必要最小限の迷惑で、必要最大限の医療を提供できるように考えて行動するべきだと思います。

最後に

今回、突然の参加申し込みにもかかわらず快く活動に参加させていただいて本当に感謝しています。また自分がお役に立てることがあれば、喜んで参加させていただきたいと思います。本当にありがとうございました。

海外からメッセージがよせられています

AMDA各国支部からのお見舞いメッセージを紹介します

「現在日本で起きている状況について大変心配しております。皆様の置かれている状況に思いを馳せ、共感と激励の気持ちを送りたいと思います。」
Dr. William Grut (アムダ・カナダ)

「震災で怪我をされた方々には早い回復をお祈り申し上げるとともに、大切な人を亡くされた方々には慈悲の心を捧げます。この困難の中、生き残った全ての方に、少しでも現在の状況が和らぎますように。また災害支援に携わる方々の弛まぬご尽力には敬服させられるばかりです。」

Dr. Mohammad Naim Rahimi (アムダ・アフガニスタン)
「私達アムダ・モンゴルの思いはこれからもアムダ本部とともにあります。僅かばかりの寄付ですが、どうかお役立て下さい。」

Dr. Oyunchimeg (アムダ・モンゴル)
「これまでの二十一年間、私は災害救援におけるアムダの不屈の努力を見届けてきました。そして、日本の皆様の逆境に対する回復力には常々感心されてきました。試練の時に傷ついた人々を全身全霊で救おうとする皆様の情熱に思いを馳せるとともに、被災された方々の心の平安をお祈り申し上げます。」

Dr. Pashupati Regmi (アムダ・ネパール)
「今回の震災は、災害の規模、犠牲者数ともに前代未聞と呼ぶほか言葉が見当たりにません。被災者の方々の心痛を心よりお察し致します。」

Dr. Arbab (アムダ・スーダン)
「日本で大地震が起き、大変な事態に陥っていることをニュースで知りました。皆様の無事をお祈りしております。どうかご無事で。」

Modesto and Kumiko Cruz (2010年チリ地震時の協力者)

「アムダ・ザンビアを代表して、継続して被災者の救援に献身的に当たっておられるアムダチームの皆様へ祈りを捧げます。アムダの卓越した慈善の精神には感化させられるばかりです。」

Dr. Jonathan (アムダ・ザンビア)

「今回の地震発生より毎日神様に手を合わせています。日本がこの状況を一刻も早く抜け出せますように。皆様の悲しみを分かち合い、どのような形にせよフィリピン国民全員が日本の復興を支援したいと願っています。」

Dr. Vogie Alva (アムダ・フィリピン)

「恐ろしい地震で被災された方々をはじめ、日本にいるアムダファミリーの皆様にもペルーの地よりお見舞い申し上げます。必要なものがあれば、どうか私達を頼って下さい。その間も私達は祈り続ける所存です。」

Dr. Augusto Ymanija (アムダ・ペルー)

「アムダ・アルバニアより、今回不運に見舞われた方々に心よりお見舞いを申し上げます。このような震災が再び起きないよう願うとともに、皆が一丸となってこの状況に立ち向かうことができるようお祈りしております。」

アムダ・アルバニア一同

「今朝、日本で起きた恐ろしい地震および津波のニュースを知り、大変心が痛みました。私達の心が日本の皆様とともにあることをお伝えするとともに、日頃より皆様が私達に助けの手を差し伸べて下さっているのと同じく、我々もできるだけ皆様のお力になればと思っております。」

Foianini Family (アムダ・ボリビア)

「日本が直面しているこの困難に対し、深く同情致します。救援にあたっておられる医療関係者の方々におかれましては、忙しさを極めていることとお察し致します。事態が少しでも落ち着きを取り戻していくことを願っております。」

Dr. Milan Stojakovic (アムダ・ボスニア)



坂茂事務所との協同
事業で避難所内に設
けられた間仕切り



訪問診療先で鍼灸治療もする高橋徳医師（岩手）



興陽高校からの米も大槌町へ



大槌町

志津川小学校医務室で5才の子を
診療する大類医師ら

日本では飲料水が手に入らない折、日本トルコ文化交流会から水2.5トンの寄贈（南三陸町）



避難所の朝食。昨日のおにぎりを焼きおにぎりに（岩手県大槌町）



新庄村（岡山県北西部）では村民を挙げてはぼ2日間で米、生野菜、
特産品の餅など2トンの食糧をあつめ、寄贈されました。3月11日夕刻岡
山をでて、13日朝大槌町に届きました。

おかやまコープでは、コープ全体としての被災地
支援に参加すると同時に、流通が厳しい中、
AMDAの活動に大量の食料品など支援物資をく
ださいました



避難所での診療（仙台）
指山医師、二瓶看護師



貸与されたパワープレート（大槌町）



避難所で点滴治療（仙台）3月



トレーラーハウスとその内部（大槌町）

ドッジボールでたのしい時間を過ごす生徒さんとAMDAスタッフ（大槌町）



大槌高校避難所内にプレイルームをつくりました



総社市からの電気自動車が、巡回診療で大活躍
被災地の方に運転手として仕事をさせていただきました。

被災した南三陸町志津川病院



大槌高校診療所薬剤部



東日本大震災で犠牲になられた方々のご冥福を
お祈りいたしますとともに、
被災者の皆様のご健康と一日も早く
日常生活に戻ることができますよう
お祈りしております。

大槌町 3月24日（城山公園から）コンクリート以外のものは壊滅状態

高田 陽子 医師 [仙台市・釜石市]

支援活動参加の経緯

今回の災害は、東北特に宮城、岩手の沿岸地域の被害状況があまりにひどく、私自身の家族、親戚がその状況下にあったこと、自分の生まれ育った町のため少しでも役に立ちたいという思いから参加を希望しました。職場の院長は自分の故郷のために行きたいという気持ちを最大限に組んで快く送り出してくれました。出来ることは本当に少ないかもしれませんが、出身が東北の医師の自分にしか出来ないこともあると思い、たとえ十分な医療行為ができなくても行くべきだし、行きたいと思いました。

業務

3/14東京から新潟へ向かい、他の派遣者の方々と合流後、宮城県仙台市へ向かいました。到着が夜だったため、その日はミーティングのみで、次の日、仙台市宮城野区の避難所の巡回診療にあたりました。午後からは岩手県釜石市に向かい、遠野市で活動拠点を決め、3/16から釜石市釜石中学校避難所で泊り込み診療を行い、3/20までの5日間昼夜、釜石中学校・双葉小学校・釜石市民体育館・大槌弓道場などを巡回しました。

気付き・反省点

私は日常業務においても、老人医療や在宅往診などをやっているため今回に関しては、その経験を生かすことができたように思



被災した高田医師御実家

います。超急性期と違い、疲労やストレスなどによる内科的疾患や高齢者における慢性疾患の対処などがメインだったためですが、十分な薬もない状態でいかに患者さんを安心させ、治療を施すかを考えさせられました。十分な医療ができなくても、医師がいるというだけで安心感をあたえられることができることを知り、医師という仕事の責任や重大性を改めて思い知らされました。難しいとは思いますが、他の医療支援団体や地元の病院などともっと情報共有ができれば、もっと早い段階でより良い医療が提供できたように思いました。

次回参加される医師(或いは看護師)への提言

- ・現場の声を良く聞いて、今何が一番自分たちに求められているかを判断して行動することだと思います。それはその場所、その時期、その災害などでどんどん変化していくものだと思うので、敏感に感じ取って、柔軟に対応できる力が求められるでしょう。
- ・現地に行き、医療従事者として歓迎されたとしても現地の人たちにお世話をかけるのではあまり意味がないと思います。必要最小限の迷惑で、必要最大限の医療を提供できるように考えて行動すべきだと思います。

最後に

今回、突然の参加申し込みにもかかわらず快く活動に参加させていただいて本当に感謝しています。また自分がお役に立てることがあれば、喜んで参加させていただきたいと思います。本当にありがとうございました。

海外からメッセージがよせられています

AMDA各国支部からのお見舞いメッセージを紹介します

「現在日本で起きている状況について大変心配しております。皆様置かれている状況に思いを馳せ、共感と激励の気持ちを送りたいと思います。」
Dr. William Grut (アムダ・カナダ)

「震災で怪我をされた方々には早い回復をお祈り申し上げるとともに、大切な人を亡くされた方々には慈悲の心を捧げます。この困難の中、生き残った全ての方に、少しでも現在の状況が和らぎますように。また災害支援に携わる方々の弛まぬご尽力には敬服させられるばかりです。」

Dr. Mohammad Naim Rahimi (アムダ・アフガニスタン)

「私達アムダ・モンゴルの思いはこれからもアムダ本部とともにあります。僅かばかりの寄付ですが、どうかお役立て下さい。」

Dr. Oyunchimeg (アムダ・モンゴル)

「これまでの二十年間、私は災害救援におけるアムダの不屈の努力を見届けてきました。そして、日本の皆様逆境に対する回復力には常々感心させられてきました。試練の時に傷ついた人々を全身全霊で救おうとする皆様の情熱に思いを馳せるとともに、被災された方々の心の平安をお祈り申し上げます。」

Dr. Pashupati Regmi (アムダ・ネパール)

「今回の震災は、災害の規模、犠牲者数ともに前代未聞と呼ぶほか言葉が見当りません。被災者の方々の心痛を心よりお察し致します。」
Dr. Arbab (アムダ・スーダン)

「日本で大地震が起き、大変な事態に陥っていることをニュースで知りました。皆様の無事をお祈りしております。どうかご無事で。」

Modesto and Kumiko Cruz (2010年チリ地震時の協力者)

「アムダ・ザンビアを代表して、継続して被災者の救援に献身的に当たっておられるアムダチームの皆様祈りを捧げます。アムダの卓越した慈善の精神には感化させられるばかりです。」

Dr. Jonathan (アムダ・ザンビア)

「今回の地震発生より毎日神様に手を合わせています。日本がこの状況を一刻も早く抜け出せますように。皆様の悲しみを分かち合い、どのような形にせよフィリピン国民全員が日本の復興を支援したいと願っています。」

Dr. Vogie Alva (アムダ・フィリピン)

「恐ろしい地震で被災された方々をはじめ、日本にいるアムダファミリーの皆様にもペルーの地よりお見舞い申し上げます。必要なものがあれば、どうか私達を頼って下さい。その間も私達は祈り続ける所存です。」
Dr. Augusto Ymanija (アムダ・ペルー)

「アムダ・アルバニアより、今回不運に見舞われた方々に心よりお見舞いを申し上げます。このような震災が再び起きないよう願うとともに、皆が一丸となってこの状況に立ち向かうことができるようお祈りしております。」

アムダ・アルバニア一同

「今朝、日本で起きた恐ろしい地震および津波のニュースを知り、大変心が痛みました。私達の心が日本の皆様とともにあることをお伝えするとともに、日頃より皆様が私達に助けの手を差し伸べて下さっているのと同じく、我々もできるだけ皆様のお力になればと思っております。」
Foianini Family (アムダ・ボリビア)

「日本が直面しているこの困難に対し、深く同情致します。救援にあたっておられる医療関係者の方々におかれましては、忙しさを極めていることとお察し致します。事態が少しでも落ち着きを取り戻していくことを願っております。」

Dr. Milan Stojakovic (アムダ・ボスニア)



日赤チームに引き継ぎをするAMDAチーム

に供えてもらい、黙祷を捧げていた。バスでの訪問は1時間ほどであったが、家族が涙する中私は、あまりにも異様な光景に、それがまるで現実なのか夢なのかかわからないような感覚に陥っていた。

罪悪感

「サバイバース・ギルト」という言葉がある。事故や災害、戦争などの生存者が、「自分は助かってよかったのか。幸せになっていいのだろうか」と、罪悪感に苛まれる状態で、PTSD(心的外傷後ストレス障害)の一種である。国際協力でもこれに似たことが起き、ボランティアスタッフなどが先進国の豊かで安全な日常に再適合できないというケースがある。

今回私は、たかだか3日半しか被災地になかったが、似たような感覚を経験した。クライストチャーチを離れ、オークランドで一日を過ごしたが、発展した市内の高層ビルを見ると、急に被災地の瓦礫の映像が重なったり、綺麗なお土産品とそれを笑顔で買う観光客が目に入った瞬間に、被災者ご家族の悲痛な表情がフラッシュバックしたりした。また、自分はAMDAの仲間を残して、こんなところで何をやっているのだという悔しさが込み上げ、今すぐにでもご家族の元に戻りたい衝動に駆られた。

もちろん、航空券の関係上仕方の無いことだったし、オークランドという美しい街を見て回れたことも結果的には素晴らしい経験だった。残暑の日差しの中、のんびりと休息をとれたことで、身体の疲れは癒え、思考や心を整理することができ、この貴重な時間は自分にとって必要な時間なのだとは自覚することが出来た。それと同時に、被災地を目の当たりにした時に、被災者の幸せを願うだけでなく、自分の幸せもしっかりと持ち続ける、というのは意外と難しく、大切なことなのだとは気付かされた。

感想と感謝

今回、ニュージーランド地震の緊急医療支援チームの一員として被災地に派遣され、何を最も学んだか、と訊かれると、それはもう、

己の未熟さと無力さを痛感した、ということ以外にはないと感じています。医学生である自分は、もちろん医療行為は出来ない、また、たかだか数日で出来ることはなお限られています。しかし、ともしれば足手まといになってしまうかもしれない身に派遣された私を、AMDAの方々は一人前の戦力として扱ってくれ、仕事に当たらせてくれました。その中で、自分には想像

もつかないような辛さを抱えるご家族とお話し、その気持ちをどのように受けとめればいいのか、また、自分は彼らのために何が出来るのかということと悩みながらも向き合うことが出来ました。感情移入しすぎてもいけない、しかし、離れすぎてしまえば意味が無い。そういったジレンマの中で失敗を繰り返しながらもご家族と24時間一緒にいられたことで、3日目には、自分の中で話し方やアプローチの仕方のきっかけの様なものが少しずつ見えてきた気がします。また、被災直後の状況を実際に見ることで、現場のにおいや、余震の振動、瓦礫から巻き起こる土埃など、テレビを通しては得られない生の“被災地”を体験することが出来ました。

己の未熟さと無力さに打ちひしがれると同時に、私は、自分にも出来ることがあるのだ、ということも学びました。私の仕事は主に通訳やお話を聞くということ、体調不良者の対

応、記録、などでしたが、情報に翻弄されるご家族にとっては、対応してほしい時に人がいることや、通訳がされるということはとても重要であったように思います。そして、ご家族の方からは「サポートしてくれるという気持ちだけで力になる」といった言葉をいただき、無力で未熟なりにも自分があの場にいたことには意味があったのかもしれないと考えさせられました。

また、緊急医療支援の現場に行くことで、たとえば災害発生から72時間までは外科や救急医療が重要となること、今回のような心のケアが必要なケースでは精神科の技術が必要となること、そして、体調不良者の対応には内科の知識が必要不可欠であることなどが良くわかり、この先医学生として4年生、5年生、6年生と勉強を進めるに当たっての目標やビジョンを具体的にあることが出来ました。現地での経験を生かし、なお一層勉学に励み、将来は半人前の医学生としてではなく、一人前の医者として医療協力を携われるようにしたいと思っています。

2011年3月10日

(村上さんは、このあと東日本大震災のAMDA緊急医療支援に参加し宮城県南三陸町立志津川小学校避難所に入りました)

96年当時AMDAの中国地震被災地復興プロジェクトにUNボランティアとして参加くださった大坪紀子さんが、この度のニュージーランド地震の犠牲者となられてしまいました。衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

2011年1月～3月の動き

<講演>		
01月18日	ミドリリーター育成講座	赤磐市教育委員会
02月02日	PTA教育講演会	岡山市立操山中学校
02月04日	立志記念・中学生ができるボランティア活動	倉敷市立福田中学校
02月07日	総合学習・国際理解教育	岡山市立平津小学校
02月15日	平成22年度広島県初任者研修特別講義	広島県教育委員会
02月18日	国際理解学習会	ラボ坊寺パーティ
02月19日	国際ロータリー第2780地区第4グループインターシティミーティング	茅ヶ崎中央ロータリークラブ
02月21日	英会話同好会行事・国際協力活動について	岡山県立勝山高校
02月21日	募金贈呈式・AMDAの活動紹介	岡山市立大野小学校
02月22日	総合学習・世界の国々を知ろう	玉野市立荘内小学校
02月23日	総合学習・国際協力活動について	岡山大学教育学部附属中学校
02月24日	生徒会行事・国際協力活動について	岡山県真庭市立久世中学校
02月24日	定例会・AMDAの国際的活動について	総社ロータリークラブ
02月25日	総合学習・AMDAの国際協力活動	岡山市立芳田小学校
02月28日	教育講演・AMDAの緊急医療活動と軍軍連携	陸上自衛隊国際活動教育隊
03月07日	総合学習・AMDAの緊急医療活動について	岡山県笠岡市立笠岡西中学校
03月15日	ボランティア学習 Daianji Project	岡山県立岡山大安寺中学校
03月28日	AMDAの理念と活動	牛窓ロータリークラブ
<大学等講義>		
01月12日	川崎医療福祉大学	医療福祉学部保健看護学科
01月24日	創立20周年記念特別講演	川崎医療福祉大学
<イベント>		
01月05日	国際協力学習会/岡山国際交流センターにて	AMDA高校生会
1月12日-22日	ハイチよりフレデリック医師と義足裨益のエズナルさん招聘	(特活)AMDA
01月15日	エズナルさんとの交流会/岡山国際交流センターにて	(特活)AMDA
01月16日	ハイチ事業報告交流会/こうべ市民福祉交流センターにて	(特活)AMDA、NPO法人よろず相談室
01月20日	エズナルさんとの交流会/立正佼成会大聖ホール(東京)にて	(特活)AMDA
1月29日-30日	ソーシャルネット提携AMDAパネル展/大丸神戸店にて	(株)大丸松坂屋百貨店
2月5-6日	ワン・ワールド・フェスティバル/大阪国際交流センターにて	ワン・ワールド・フェスティバル実行委員会
3月11日-13日	チャリティ洋蘭展/国民宿舎サンロード吉備路にて	岡山県洋蘭協会・日本蘭協会東中国支部
3月26日-4月1日	AMDA/バンラデッシュ事業見学教育プログラム	(特活)AMDA

支援者紹介

魂をゆさぶる《歌の処方箋》



北島音楽事務所に所属する歌手北山たけしさんが4月8日、南三陸町の志津川小学校避難所にAMDAジャンパーを着て登場。アカペラの演歌を披露され、その歌は被災者の方々の魂をゆさぶることになりました。歌の後は被災者の中に入って話を聞いたり励ましたり、皆さん感動して涙、それにつられて北山さんも涙、見ているAMDAチームも涙の感動

の時間となりました。避難所のみなさんは、これで元気がでた、癒されたとそれぞれすがすがしい表情になられました。

RNN(人道援助宗教NGOネットワーク)の方々は3月13日から4月12日までの1か月間、岡山市街にて街頭募金していただきました。



倉敷アカデミックウインズ第19回定期演奏会でチャリティ募金

募金活動に取り組んで

鏡野町立奥津中学校生徒会 学級委員会

私たちの学校では、毎年ボランティア活動の一つとして、募金活動をしています。そして、学級委員会で話し合った結果、22年度後期はAMDAに協力することにしました。それは、岡山市に本部があることや、世界中で苦しんでいる人達のために、各地で活動していることを知ったからです。そしてチラシや募金箱をつくって協力を呼びかけました。その結果、全生徒41名、保護者、先生方が協力してくれました。ささやかですが、今も世界のどこかで苦しんでいる人達のためになればいいなと思っています。



岡山県北の奥津中学校の1月の校庭

ブラジル洪水被災者に対する緊急支援活動 —総社市・AMDA合同ミッション—

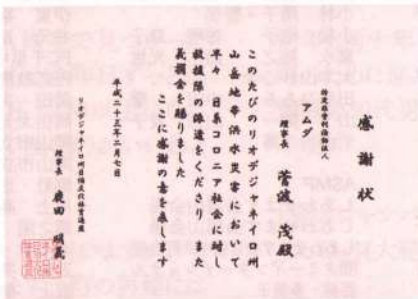


最も被害の大きかったノバプリブルゴで—総社市職員譚氏—

ブラジル連邦共和国リオデジャネイロ州で1月11日から台風による大雨の被害が発生。死者870人を超え、35000人が避難するブラジルにおける過去最大規模の自然災害となりました。AMDAではAMDAグループと連携を結んでいる*総社市との合同ミッションとして総社市嘱託職員のブラジル人である譚 俊偉(たん しゅんわい)氏とAMDA本部スタッフで看護師

の石岡末和を被災地に派遣しました。支援物資へのアクセスが難しい人々への直接的な物資の支援として、現地では手に入りにくい豆乳粉ミルク缶250缶を2月12日、ノバプリブルゴ市の被災家族へ届け、また日系家族被災者の方への義捐金贈呈を行いました。

*岡山県内で多くのブラジル人が住む総社市では、市内の小・中学校、高校、岡山県立大学などの教育現場をはじめ、市民を対象にした社会教育の現場、市内でのイベントなどにおいて、市内に在住する外国人と共に暮らしていける多文化共生社会の構築を推進しています。そこで多文化共生社会構築のパートナーとして総社市とAMDAグループは、平成21年6月19日に「多文化共生に関する協定」を結んでいます。



NPO法人AMDA国際医療情報 センター設立20周年記念式典

AMDAグループ 市民参加型人道支援
外交ラウンドテーブル開催のご案内

開催日時 2011年5月21日(土)
14:00~17:00/懇親会17:00~19:00

開催場所
田町カンファレンスセンター 9階9C室
東京都港区芝4-8-2 興和三田ビル
参加費 300円/懇親会2,000円
(両方参加される方は2,000円)

定員 70名(先着順に受付)

プログラム

- 第一部 特定非営利活動法人AMDA国際医療情報センター設立20周年記念式典
- 第二部 市民参加型人道支援外交ラウンドテーブル
東日本大震災での特定非営利活動法人AMDAの活動について
- 第三部 懇親会

【お問い合わせ】

AMDA国際医療情報センター
センター東京事務局 (担当:鈴木)

TEL:03-5285-8086

FAX:03-5285-8087

e-mail:amdamedicalcenter@nifty.com